



奇妙な家族

さやかの宇宙

春日信彦

しゃべる動物たち

スパイダーは、亜紀と気持が通い合い、目が合うたびに話しかけるようになっていた。亜紀は、学校から帰ると、スパイダーのサークルに飛んでいき、スパイダーを抱きしめた。スパイダーが「おかえり」と挨拶してくると、亜紀も「ただいま」と返事するようになった。最近では、「亜紀がいないときは、遊び相手がいなくて、つまんない」と、愚痴を言うようになった。亜紀は、もう一匹かわいい柴犬を飼いたいと思っていた矢先、庭に上品なキジ猫がやってくるようになった。土曜日の朝、庭に出てみると、いつものキジ猫が庭のテーブルの下でじっと潜んでいた。

このキジ猫は、大人の体形をしていた。最初は、近所の飼い猫だと思い、声をかけなかったが、徐々に庭の中に入ってくるようになったため、亜紀は、声をかけて呼び寄せてみた。亜紀は、この猫には名前があると思い、ミー、モモ、タマ、チョン、とか、思いつくままに名前を言ってみたところ、「アイアム、ピース」と笑顔を作って答えた。そして、ゆっくり亜紀に近づき、頭を亜紀の足にこすりつけ、亜紀から離れようとしなくなった。

英語を話した猫に、亜紀はびっくりしたが、おそらく、飼い主の誰かがアメリカ人だと思った。「こんにちは、女の子のピースです。よろしく。亜紀ちゃんのお家に住みたいけど、いいかしら」ピースは、さらに日本語で話した。この猫は、かつて、とても人間に可愛がられていたようで、まったく、亜紀を警戒しなかった。ピースは、英語も日本語も話せるバイリンガルだと目を丸くして拍手した。

「ピースは、どこから来たの？」亜紀は、毛並みのいいピースに問いかけた。「私は、亜紀ちゃんの家近くのうちで飼われていたの。ご主人は日本人で、奥さんはアメリカ人だったの。ご主人は、Q大の教授だったみたい。ノーベル賞をとるんだといって、ピースを残して、夫婦そろって、アメリカに行っちゃったわ。ほんと、冷たい夫婦よね。だから、今は、あちこちの家を廻って、餌をもらっているの。あ～、お腹すいちゃった！」ピースは、飼い主に捨てられたことを悲しそうに話した。

亜紀は、ペットを捨てるなんて、許せないと腹を立てた。「私は、ブリティッシュ・ショートヘアなの。日本のキジトラによく間違えられるわ。時々、ピースがかわいいから、捕まえようとする悪ガキがいるの。彼らに捕まったら、何をされるか分かったもんじゃないわ。亜紀ちゃんなら、信用できるわ。是非、亜紀ちゃんにかわいがって欲しいの」ピースは、亜紀を見つめながらお願いした。

亜紀は、飼ってやりたい気持でいっぱいだったが、スパイダーを飼ったばかりで、さらに、猫まで飼うことをアンナが許してくれるか不安だった。「ピース、しばらく待って。ママにお願いしてみるから。一所懸命お願いしてみる。今、家には、スパイダーって言うやんちゃな子犬がいるの。つい最近、やって来たばかりで、ママもまだ慣れてないのよ。犬と猫を同時に飼うことを許してくれるか、わかんないの、だから、もう少し我慢して」亜紀は、こんなに気立てのいいピースを野良猫にしたくなかった。

人懐っこいピースが捕まって、保健所に連れて行かれたならば、殺されてしまうような気がした。亜紀は、一刻も早く、アンナにお願いすることにした。即座に、アンナのいる厨房にかけていった。アンナは、厨房の丸椅子に腰掛け、大きなお腹をそっとなでていた。「ママ」亜紀は、大きな声で叫んだ。アンナは、お客がやって来たと思い、お腹に手を当てて、小さな声で返事した。「お客さんなの？まだ準備中よ。待ってもらうように言ってちょうだい」

駆け足でやって来た亜紀は、しばらく息をつまらせ言葉が出なかった。「どうしたの、亜紀、そんなにあわてて。キモイお客でも来たの？」アンナは、気持ちを落ち着かせようと、亜紀の右手を握り締めた。亜紀は、息を整えると、勇気を出して話し始めた。「ママ、また、お願いがあるの。家の庭に可愛いそうな捨て猫が迷い込んできたの。その猫ね、とても気立てがよくて、おりこうさんなの。その猫は、ピースって言うんだけど、ピースね、亜紀のことが好きだって。だから、ピースを世話したいの。いいでしょ」亜紀の真剣な表情にアンナは、身を反らした。

アンナは、亜紀のわがままにムカついたが、捨て猫をどうしていいか分からず、さやかに相談することにした。「亜紀、その猫は、本当に捨て猫なの？近所の猫が迷い込んできたんじゃないの？とにかく、さやかを呼んできて」アンナは、出産のこと意外ほかの事を考えたくなかった。亜紀は、キッチンにいるさやかのところに飛んでいった。さやかの手を引いてやって来た亜紀は、もう一度、さやかとアンナの前で捨て猫の話をした。さやかは、とりあえず、捨て猫を見えることにした。

「捨て猫は、どこにいるの？」とさやかが尋ねると、亜紀は、さやかの手を掴み、庭に引っ張っていった。テーブルの下でじっと小さくなっているキジ猫を指差し、「あそこ」と言って、さらに、キジ猫のところまでさやかを引っ張っていった。さやかは、しばらくキジ猫とにらめっこをした。キジ猫は、身動きせずじっとさやかの反応を観察していた。「確かに、気立てのいい猫みたいね。でも、本当に、捨て猫かしら。近所の猫じゃないの？」さやかは、近所の猫が、餌ほしさに庭に迷い込んできたように思えた。

亜紀は、ピースから聞いた話をすることにした。「この猫は、ピースっていうの。飼い主が引越したときに、置いていかれたんだって。とっても、かわいそうな子なの。とっても、おりこうさんよ。お腹もすかしているし、さやかから、ママにお願いして。この通り」亜紀は、両手を合わせてお願いした。さやかは、腕組みをして、しばらく考えた。「そうね、捨て猫のようでもあるし、見捨てるのもかわいそうよね。とにかく、ご飯をあげなくっちゃね」さやかは、アンナを説得することにした。

さやかの宇宙

さやかは、キジ猫ピースを責任もって世話をすることを誓い、どうにかアンナの承諾を得た。聖母のような笑顔で寝入ったアンナの寝顔を確認すると、さやかは、寝床の中でいつものように宇宙について考え始めた。ブラックホールでは光より速いスピードでエネルギーが吸収され、新しく形成されたエネルギーが宇宙を創造している。

宇宙は無限に外向し続け、同時に内向し続けている。言い換えれば、宇宙は無限に膨張し続けていると同時に縮小し続けている。エネルギーは、宇宙を作り出し、無限に有機物、無機物を作り出している。地球も、水も、空気も、鉱物も、植物も、動物も、人間も、エネルギーの姿だ。人間の脳は、エネルギーを記号化できる唯一のエネルギーといえる。

脳とは、無限の情報の集合体である。したがって、脳の情報を記号化するには無限の時間を要することになる。おそらく、人間が生存し続ける限り、人間の知的欲求は、脳情報の記号化を求め続けることになる。脳というエネルギーは、永遠に人間にとって不可思議なものとして存在し続けることだろう。

脳といえば、一般に、大腦のことを考えるが、脳幹も、小脳も、大腦辺縁系も、脳である。われわれ人間は、宇宙という無限の情報集合体を記号化できないのと同様に、無限の脳情報をすべて自覚することはできない。意識にのぼってくる情報は、ほんのわずかでしかない。一般に天才といわれる人間でさえ、記号化、言語化できる脳情報はわずかでしかない。いわんや、われわれ凡人がなしえる脳情報の記号化、言語化は、ほんの微々たる物でしかないといえよう。

われわれは、エネルギーの実態を把握することはできない。できることといえば、具体的なエネルギーを数値化、記号化することぐらいだ。今のところ、数値化、記号化は、理論構築に役に立つということで、科学者を安心させている。だが、エネルギーのそのものを理解することは永遠にできないかもしれない。面白いことに、人間の言語中枢が発達したことにより、人間の不条理を明確化し、ますます悩むようになって来た。

ほとんどの人は、数値化、記号化されたエネルギーを常識化し、身近なものとして認知しているが、エネルギーの誕生、変化、消滅、を理解できる人はいない。つまり、エネルギーそのものは、いったい何ものなのか？エネルギーの起源というものはあるのか？エネルギーは消滅するということがあるのか？まったく検討がつかないのが、エネルギーといえる。今のところ、未知なる脳というエネルギーを保有する人間は、脳を言語化し、記号化して、多少なりともエネルギーについて理解できたと、安心する以外にないであろう。

自然現象や、社会現象を言語化し、言語化されたものを理論と呼び、理論の集積を現実の理解とみなしている。現実つまりエネルギーの理解とみなしている。そこでちょっと考えてみよう。言語化されたものは、現実なのだろうか？現実をどれだけ反映しているのだろうか？言語化は、確かに現実のほんの一部を切り取っているかもしれない。だが、“言語”は現実そのものではない。

人間は、現実の世界で、現に生きることはできても、それ以外の新しい現実世界を作り出す能力はない。人間が、高度の記号力、言語力を身につけるようになって、今ある現実とは別の現実を作り出すことはできないのではないだろうか？人間の能力を有限的に述べることは、悲観的のように思えるが、もしできたとしても、どれほど先のことになるか計り知れない。

われわれに与えられた「脳という資源＝エネルギー」を今後どのように使いこなすことが、人類に最も有益なことか考えてみる必要があるが、今のところ、快樂という脳機能が邪魔をして、脳をより有効に使いこなせてないといえよう。脳の機能は、生命を維持するためにいろいろなことをやってのける。食べたり、寝たり、交尾したり、けんかしたり、踊ったり、歌ったり、物を作ったり、話したり、描いたり、殺人したり、具体的に記述すれば無限にあるかもしれない。

人間は脳を酷使し、文化を創造し、貨幣を創造し、人間関係を複雑にしてきた。今までになかった幸福を作り出し、今までになかった不幸を作り出してきた。身近な言葉でエネルギーを表せば、「幸福と不幸」といえるのではないだろうか。ちょっと不思議に思えることなのだが、われわれは幸福をひたすら求め続けている。それと同時に、不幸は現実には起こり続けている。宇宙においては、「幸福と不幸」という、相反するエネルギーが同時に存在し、決してなくなるというエネルギーのように思える。

人間という生物は、精子と卵子の合体によって誕生する。受精卵が、細胞分裂し、成長し、人間となる。お腹にいる胎児は、羊水の中で成長し、さまざまな非言語の概念情報を増殖させている。お腹の胎児も、生まれたばかりの赤ちゃんも言葉は話さない。だが、すでに彼らは、無限のエネルギー概念を保有している。しばらくすると、赤ちゃんは脳も身体も徐々に成長し、言語中枢が発達していくと、言葉を発するようになる。

われわれは、宇宙に存在しているから、宇宙生物であり、地球に生存しているから、地球人でもある。日本に生まれた赤ちゃんは、日本人だ。アメリカに生まれたならば、アメリカ人だ。フランスに生まれたならば、フランス人だ。インドに生まれたならば、インド人だ。日本に生まれた赤ちゃんは、日本語を話すようになる。まあ、これは、両親のうちどちらかが日本語を話した場合のことだが。

地球上には、いろんな人種がいる。黒、白、黄色、茶色、などいろんな色の人種がいる。日本語、中国語、韓国語、英語、ドイツ語、などそれぞれ違った言葉を話す人種がいる。だが、彼らみんな、地球人だ。できれば、地球人を理解するために、地球でないどこかの星の人間に似た生物がいたならば、とても都合がいいのだが、いまだ、そういう宇宙人は現れてくれない。そのため、地球人は自分たちを客観的に考えるのが難しいといえる。

人間と宇宙人とを比較できないとなれば、地球上の生物といろいろ比較してみる以外に人間の特徴を明確化する方法がないことになる。したがって、科学者たちは、人間と動物を比較し、人間は動物から進化したと結論付けている。その真偽は、別にして、人間は、地球上では最も発達した脳を持っている。この脳が、言語を生み出し、ものを加工し、ものを作り出し、自然環境を変化させてきた。

人間の身体は、他の動物とかなり違っているが、これも脳の違いから来るものと考えれば、人間の特筆すべき特徴を脳と考えてもいいだろう。脳の中でも、言語中枢こそ人間の最大の特徴といえよう。身体的能力においては、人間以外の動物のほうが優れている場合がある。たとえば、走ったり、泳いだり、ものを持ち上げたり、などだ。言語に関しては、人間が最も秀でていているといえる。他の動物にも言語らしきものはあるが、人間が作り出す言語と比較したならば、良質ともに、比較にならないほど程度が低い。

今、人間の脳以下の脳が、地球上に存在するのは分かったが、そこで考えてみたいことは、人間の脳以上に優れた脳が、宇宙のどこかに存在するのだろうか。今、脳という言葉を使ったが、宇宙のどこかには、「人間の脳」とは別の「脳以上の物質」があるのだろうか知りたいものだ。おそらく、このことは誰も思うことではないだろうか。もしあるとするならば、「脳以上の物質」は人間が使う言語を使わずに、コミュニケーションできるかもしれない。

われわれは、人間の脳を血眼になって研究し、できれば、精子や、卵子を作り出せないかと躍起になっているが、人間の脳が、生命を人工的に作り出せるようになるまでは、かなりの時間を要するに違いない。人間の脳が、どの程度のものかは誰も分からない。今までに、多くの天才たちが、いろんなものを発明し、革新的な理論を発表してきたが、果たして、「脳以上の物質」から見たならば、これらにどんな評価を与えるのだろうか？

天才といえども、脳の活用には限界がある。まず考えられることは、細胞の寿命だ。いわんや、凡人たちにとって、脳を最大限に活用することは、至難の業だ。天才たちが最大限に脳を活用して、ある分野において、優れた業績を残していたとしても、それも脳の活用からすればほんの一部でしかないといえる。天才も凡人も脳の活用について知りたいことは何か？おそらく、脳を最大限に使いこなすための「脳の使い方」ではないだろうか。

それが分かれば、天才も凡人も可能な限り有効に脳を使いこなせることになる。今注目を浴びている脳は、「グリア細胞」だが、この脳の使い方については、まだまだ研究が必要のようだ。脳の有効利用に必要なことは、精神的なことからアプローチすると、あらゆる事象についての考え方の基本となる宇宙の論理学を習得することだ。また、脳物質からアプローチすれば、ニューロンとグリア細胞の相関的なフル活用だ。

まだ、人間の脳は、未知なる物質だ。かなり研究がすすんでいるが、おそらく、脳という物質のほんの一部しか解明してないように思える。さやかは、地球人の脳を宇宙において高度に発達した物質で、地球上で最も重要な資源と考えている。だが、「脳以上の物質」の存在を考えたとき、人間の脳の限界を痛感している。というのも、動物が共食いするように、人間も戦争という形で共食いするからだ。

脳が脳を破壊する行為は、「脳の進化」といえるのだろうか？「脳の進化」とは、いったいどういうことなのだろうか？天才が、脳を最大限に活用したとしても、それは活用したのであって、脳を進化させたわけではない、といえる。それでは、「脳の進化」とは、いったいどういうことなのかを改めて考えさせられる。脳は、天才のように高度に活用しても、進化しないのではないか？

天才も凡人も、「脳以上の物質」を夢見るが、やはり、今のところ夢でしかないようだ。とりあえず、今ある「人間の脳」という地球上の資源をいかに有効利用するかを考えることが先決だが、天才たちは、むしろ、このことを実践することに手を焼き、脳の破壊行為に走っているように思える。未知なる宇宙において、人間の脳は、いかなる役割を果たしていくべきなのか、誰も答えを出すことはできない。

さやかの願いは、脳資源を有効利用し、脳を進化させることだが、そんな夢を見るばかりで、今、考えている間も行われている「共食い行為」に悲しんでいる。人間の脳が、「脳以上の物質」に進化する時は、いつやってくるのだろうか。永遠にやってこないかもしれない。でも、夢は永遠に見続けたいものだ。今言えることは、人間という生物が永遠に存在するとするならば、「悲しみと喜び」が永遠に存在するということだ。きっと、さやかは、死ぬまで実現しない夢を見続けることだろう。

拓実の想い

アンナの卵子と拓也の精子の合体によってできた受精卵の細胞分裂は、ほとんど人間の形態をなすまでになった。その生命体は、静かに、しかも急速に、情報の集合体となり続けている。また、大気圏の生物としての準備を続けている。すでに、脳という物質は、出来上がっている。彼の脳の一部では、猛烈なスピードで、宇宙の概念を構築している。じっと目を閉じた彼は、非言語情報の中で遊んでいる。

彼は、脳が形成し始めてから、独り言を言い始めていた。情報を操作している生命体をボクとしておこう。ボクは、大気圏に出現したとき、拓実という名前を与えられる。この名前は、ボクをお腹の中で育てているアンナという女性、ボクの母親、拓也の妻、が考えた名前だ。ボクは、とても気に入っている。

お腹の中にいるボクに向かって、母親のアンナは、五ヶ月前から、拓実と呼んでいる。ボクが誕生するために必要な精子を提供したのは、ボクの父に当たる拓也だ。拓也は、今はいない。形式的な戸籍上では、死んだことになっているが、実は、性転換をして、女性として生きている。名前は、関拓也からルーシー関根になっている。糸島中学で数学の教師をやっている。とてもユニークな授業を実践しているみたいで、生徒たちに人気がある。

ボクには、アンナの実の子ではない養子縁組をされた亜紀という名前の妹がいる。それと、最近、桂会長の執事をしている優しいおじさんにもらった、名前がスパイダーというシェルティの子犬が家族の一員としてはしゃいでいる。亜紀は、小学校一年生だが、とても賢くて、言語能力に長けている。スパイダーは、やんちゃだが、思いやりのあるシェルティ犬だ。亜紀は、大好きな動物とお話ができる能力を持っている。つまり、犬の心から発信される情報を人間が使う言語に翻訳する能力を持っている。今では、毎日のように、スパイダーとお話をしている。

スパイダーは、とても感受性が強く、人間の心の奥底に潜んでいる非言語の情報を感じ取ることができる。スパイダーは、アンナ、さやか、近所の住民、アンナの家にやってくる人々の心を感じ取り、亜紀に面白い裏話をしている。亜紀も、スパイダーという親友ができて、いっそう明るくなった。亜紀には、二歳年下の俊介という弟がいたが、母親がいないうちに二歳で餓死してしまった。そのことは、消えない傷となってしまったが、スパイダーは、俊介の代わりに亜紀を励ましている。

亜紀は、失踪した母親、知美がいつか迎えに来てくれると、心の底でいつも思っているが、アンナには、そのことを決して話すことはない。今の母親、アンナは最高の母親とっていて、アンナこそ、今では本当の母親と思っている。産みの母親への想いは、夢の中にしまい込み、死んだ後に天国で会えればいいと思っている。時々、知美がスパイダーになって現れるが、その知美は、励ましてくれるだけで、今どこにいるかは話してくれない。でも、知美の声が耳に響いたときは、天国で母親と話しているような夢心地のハイな気持になる。

ボクの母親、アンナにはさやかという親友であり愛人がいる。アンナもさやかも女性だが、二人は子供のから愛し合っている。二人は、孤児院で知り合い、さやかは、アンナを妹のようにかわいがってきた。さやかのことだが、誰もさやかの出生を知らない。さやか本人も、実の母親と父親を知らない。ある日突然、さやかは、孤児院の玄関前に5歳のときに捨てられた。捨てられたというより、人工人間を研究しているステーションのスタッフから、孤児院で生活するように命令され、玄関前に立たされたのだ。

ステーションでは、いろんな目的とした人間を生産する研究をしている。体力的に秀でた人間、形態的に優れた人間、言語能力に秀でた人間、イメージ能力に秀でた人間、音楽的に優れた人間、脳部位について言えば、大脳新皮質の前頭葉が秀でた人間、その側頭葉が秀でた人間、小脳が秀でた人間、海馬が秀でた人間、あらゆる実験が未公開の研究施設でなされている。未知の遺伝子操作を行うため、当然期待はずれの失敗作も生産される。そのために、この脳研究機関に関する情報は、特別秘密情報保護法によって、国家機密とされ、決して漏洩することはない。

さやかも遺伝子操作をされて誕生した人間だった。さやかの場合、言語能力に秀でた人間を目的として、遺伝子を操作され生産されたが、予想外の欠陥が生じていた。つまり、たとえ、卵子と精子とが合体できたとしても、受精卵にならないという奇妙な卵子を作り出す卵巣を保有する人間として、さやかは出来上がった。このような例は多く、今のところ、何らかの欠陥を保有する遺伝子操作された人間が数多く生産されている。

さやかは、スタッフに5歳という年齢を教えられ、孤児院の前に立たされたが、その年齢も本当の年齢かどうかは、はっきりしない。この年齢が本当であれば、さやかは30歳ということになるが、見かけは、JKに見える。背は低く、童顔なため、セーラー服を着せても誰も疑わないほどの、少女っぽさを持っている。ドクターと出会ったさやかとアンナは、彼のモルモットとして9年にわたる共同生活を送っている。

さやかの趣味は、ゲームと推理で、男性にはあまり興味がない。拓也を一時的に好きになったが、自ら身を引いて拓也をアンナに譲った。二人は、お互いに共同生活を望んでおり、死ぬまで愛人関係を続けることにしている。さやかは、時々ウツになる精神病を持っているが、特に問題なのは、知能殺人犯になってしまうことだ。すでに、天誅と称して数人の政治犯を暗殺している。それらは、さやかの高度な知能を使った完全犯罪だ。

さやかは、これからも暗殺を計画しているが、アンナには極秘でドクター、ルーシー、桂会長、とともに実行することにしている。アンナに子供が生まれたならば、暗殺に反対するに違いないと考えたからだ。さやかは、宇宙というエネルギー現象を理解しており、人間の共食い行為は、宇宙現象と考えている。したがって、さやかは、自分の暗殺は共食いのひとつで、宇宙の法則からすれば、正当なものと考えている。

さやかの暗殺は、戦争という共食いを肯定した上での行為で、決して個人的な恨みとか発狂によるものではない。だから、一般人を突然殺すというようなことは、決してない。さやかは、子供が大好きで、孤児院では多くの子供たちの面倒を見ていた。精神病院の看護師になってからも、虐待された多くの子供たちの心をケアしてきた。ボクは、そういうさやかに会える日を楽しみにしている。

アンナは、母親、美紗子が病死した後、8歳で孤児院にやって来たが、アンナの父親は、誰なのか、はっきりしない。さやかは、桂会長が実の父親と確信しているが、実証するものはまったくない。アンナは、母親から父親のことをまったく聞かされていない。ほんの少し記憶に残っていることは、母親は、20歳のころストリッパーをやっているときに知り合った、ある若い青年画家のヌードモデルとなり、その男性としばらく付き合ったということだけだ。

母親、美紗子は、未婚の母としてアンナを懸命に育てた。決して、未婚の母であることを後ろめたく思っていなかった。むしろ、愛する青年画家の子供を、産み、育てることに誇りさえ持っていた。また、青年画家が美紗子の妊娠を知らずフランスに勉強に行きたいと打ち明けたときも、笑顔で承諾し、さわやかに見送った。子供のころ、アンナは、母親を捨てた父親を憎んでいたが、今では憎しみは和らいでいる。愛する拓也の子共を身ごもってからは、美紗子の気持がほんの少し分かるようになった。

この青年画家のことを知るものは、誰もいないが、さやかは、桂会長の表情から発せられる情報から、美紗子が愛した青年画家は、桂会長と推測した。桂会長も、アンナが実の子共という確証はないが、アンナの顔を見つめていると、自然に美紗子の顔に変わっていくという不思議な体験から、アンナは、実の子だと思い込むようになった。桂会長は、留学先のフランスで画才がないことに気づき、その後、各地を放浪しているうち、マフィアの一味になった。マフィアでは、ひらめきに秀でた彼は、ボスに気に入られ、幹部にのし上がった。今では、武器製造販売をする戦争ビジネスのドンにまでのしあがった。

ボクは、戦争ビジネスのドンとやらに会いたい、アンナは、きっと反対すると思う。アンナは、軍国主義が大嫌いで、亜紀が軍人になることを反対しているように、ボクが軍事にかかわる仕事に就くことにも反対するに違いない。ボクの夢は、ロボットを開発するエンジニアだが、ロボットが兵器として利用されている現在、アンナは、快くその仕事に就くことに賛成してくれないように思える。

我が家には、テキサスからやって来た金髪の居候がいる。バーバラという糸島中学の英語の教師だが、彼女は、とんでもない淫乱女性だ。イケメンを見ると興奮し、たとえ彼に彼女がいても言葉巧みにホテルに誘うほどの危険な女性だ。すでに、秋元校長は、陥落させられた。今狙っているのは、3年エリートクラス担任の稲垣先生だ。陥落させられるのは、時間の問題だ。今付き合っている黒人男性は、単なるセックスフレンドでしかない。

バーバラ先生は日本人だが、小学校からテキサスに住んでいたため、日本の風習にまったく馴染めない。校長は、できれば一刻も早く、糸島中学を出て行って欲しいと願っているが、彼女は、かつて外務大臣をしていた大物政治家の孫で、追放しようとしてもしたならば、それこそ校長をクビになりかねない。“君子危うきに近寄らず”と校長と教頭は、腫れ物を触るように彼女と接している。

校長は、バーバラ先生との肉体関係を篠田教頭には内緒にしているが、教頭は、当に見抜いている。校長は、バーバラ先生のはりのある若肌におぼれ、もはや、彼女の奴隷になってしまった。だが、教頭は、バーバラ先生を選挙に利用するため、あえて、二人の関係を知らないそぶりをしている。教頭の願いは、一刻も早く校長の子供を妊娠し、そして、即座に学校を退職し、出産後は、衆議院議員選挙の準備に入りたいと思っている。

バーバラ先生は、最近外泊が増えている。これは、校長のマンションで一夜を過ごしているのと、黒人の彼氏とラブホで夜を楽しんでいるからだ。外泊が多いバーバラ先生のことをさやかとアンナは、心配しているが、あまりにも生活習慣が違うため、どのように話を持っていけばいいか悩んでいる。単刀直入に、どこで外泊しているか聞くのも、気まずいようで、今のところそっと見守っている。

バーバラ先生はペットが好きで、亜紀がシェルティのスパイダーを紹介したとき、抱きしめて喜んだ。テキサスにいるときは、犬、猫、ヘビ、をペットに飼っていた。ちょうど、猫でも飼いたいと思っていた矢先で、ペットを飼うことをアンナにお願いしようと考えていたところだった。亜紀は、バーバラ先生がペット好きであることを知って、安心した。バーバラ先生は、英語でスパイダーに話しかけるため、最近では、スパイダーが英語を話すようになってきた。

あ、そう、つい最近、ピースという上品なキジ猫が、居候することになった。ママは、あまり気がすすまなかったが、亜紀とさやかのお願いに根負けしたみたいで、どこからやって来たか分からないキジ猫を飼うことをしぶしぶ承諾した。ピースは、とても賢く、バイリンガルでスパイダーのいい友達になってくれると思う。スパイダーは、正義感が強いが、ちょっとおっちょこちょいだから、ピースお姉さんの指導を受けるといいと思う。

ママ、さやか、亜紀、バーバラ、スパイダー、ピース、たちの顔を早く見たい。ボクは、ママそっくりで、女の子みたいだから、みんな、ボクを見てびっくりすると思う。羊水の中は、宇宙遊泳しているみたいで、とっても居心地がいいけど、早く、手足をバタバタできる地上で遊びたい。ア！ボクを何かが強く押している。これが、陣痛ってやつだな。ママが、なにやら、叫んでいる。ママ、今行くからね～！

奇妙な家族

<http://p.booklog.jp/book/80201>

著者：サーファーヒカル

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/novel8686/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/80201>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/80201>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ